

I. 説明

<<全体的な説明>>

生活や行動面に何らかの苦手さを示す子どもたち（気になる子ども）には、早期からの支援が大切です。近年、注意欠如多動症（ADHD）や自閉スペクトラム症（ASD）については研究や理解が進み、支援の体制も整備されてきました。

一方、幼稚園や保育園の段階で目立ちにくい苦手さを示す子どもたちについても、早期の発見や支援が重要であることが分かってきました。

観察シート（GLASP（Check List of obscure disAbilitieS in Preschoolers））は、目立ちにくい4つの状態（吃音、チック症、限局性学習症（LD）、発達性協調運動症）の可能性に気づくためのチェックリスト（GL）です。ただし、本GLは診断を確定するものではありません。支援につなげる目的で活用いただきたいと考えます。

<<概要と特徴>>

対象年齢：5－6歳 年長児

所要時間：一人あたり5分程度

項目数：19

付けるひと：幼稚園、保育園、巡回相談の先生

気づくことができる状態：吃音、チック症、限局性学習症（LD）、発達性協調運動症

<<付け方と結果の見方>>

- 記入法：各項目の様子が、幼稚園／保育所で、普段どれくらい見られるかをチェックして下さい。（目安 常に＝毎日・毎回、時々＝気づくことがある）
- 付けるタイミング：手早くチェックしたいとき。就学前に確認したいとき。保護者からの相談を受けたとき
- 見方：それぞれの区分で「常に」や「しばしばある」が1－2項目以上付けられたときは、関わり方の工夫が必要です。

<<チェックの数とリスクについて>>

「話し方」で3項目中2個以上 → 吃音 診断一致率が97%

「くせ」で5項目中1個以上 → チック症 診断一致率が90%、

「読み書き」で5項目中1個以上 → LD 診断一致率が88%、

「運動」で5項目中1個以上 → 発達性協調運動症 診断一致率が85%

（平成28-29年度厚生労働科学研究「顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究」に基づく成果）

<<園での関わり方>>

線に沿って折りたたみ、子どもの症状を確認しましょう。裏面に示されている内容を参考にし、一人ひとりの支援につなげることが重要です。

●話し方の4項目（原 由紀）

（1）説明と付け方

CLでは吃音を「話し方」と表現しています。

吃音は、話す状況やお話の内容、時期、相手により出やすくなったり、全く出なかったりします。例えば、先生に話す場面、お友達と話す場面、家族と話す場面、係の声かけ、お誕生日会など皆の前で話す場面など、なるべく毎日の生活の様々な場面でのお話の様子を観察し、思い浮かべて頂き、チェックをつけて下さい。

1～3は、吃音の中核症状といわれる、「繰り返し(連発)」と「引き伸ばし(伸発)」「阻止(ブロック・難発)」を示す内容です。1～3の3項目が、変動があっても1年以上継続しているかどうかを4でチェックします。

1「初めの音やことばの一部を何回か繰り返す（例：「ぼ・ぼ・ぼ・ぼくが」、「おか・おか・おかあさん」など）」

1は、比較的観察しやすい項目であり、この時期のお子さんに、最も見られやすい項目です。これに対して、「ことば全体を繰り返す(例：「おかあさん、おかあさん、おかあさんがね）」や、「1回だけの繰り返し(例：「おおかあさんが）」は、吃音ではないお子さんにも、よく見られる非流暢な話し方です。この様な場合はチェックをつけなくて下さい。

2「初めの音をひきのばす」（例：「ぼーーーくがね）」

2は、吃音以外のお子さんにはあまり見られない項目です。音を伸ばす方言やお友達の名前などを特別に伸ばす場合などは除外して下さい。

3「言いたいことがあるのに、最初のことばが出づらく、力を込めて話す(時に顔面をゆがめることなどもある)」

3は、阻止(ブロック)または難発といわれる話し方を指します。言語発達がゆっくりで、なかなか単語が出てこないような場合も「ことばが出づらい」と判断されて、チェックをつけられることがあります。「力を込めて話す」が吃音の症状の判断には重要となり、時に顔面をゆがめるほど、力が入る事をさします。これ以外に、身体を揺すりながら話すとか、口を大きく開けたまま止まってしまうとか、息を荒げて話す場合もあります。そのような時はこの項目にチェックをつけて下さい。この項目は、吃音でないお子さんを取り込んでしまうリスクもありますが、本当にこのような吃音症状がある場合には、吃音が進展し、話しづらい状態になっていることも考えられます。

4「1～3の話し方の様子が、変動はみられるが、1年以上継続している。」

幼児期の吃音は、全く症状が見られない状態から、とてもひどい状態まで変動を繰り返します。数日で変わる場合もありますし、数ヶ月で変わる場合もあります。1～3の話し方をできるようになってから、1年以上経過しているかどうかをチェックして下さい。吃音の症状と合わせ、積極的な介入を開始した方が良いかどうかの目安になります。

（2）園での関わり方

吃音は、時間のない中で話そうとしたり、長く複雑な文を話そうとしたり、目の前にない話を説明しようとしたりとすると、出やすくなり、言語発達と大きく関係があります。

また、年中の後半頃から、子供同士がお互いの”違い”に気づき、指摘をするようになります。無邪気に「どうしてそんな話し方なの？」と聞いてきたりします。この時期の園の先生方の対応は非常に重要となります。以下の点にご注意頂けると、お子さんの吃音を減らし流暢な話し方を促進する助けとなりますので、ご協力をお願いいたします（リーフレット参照）。

<基本的な対応>

1. 話し方のアドバイスはしないで下さい。「ゆっくり言ってごらん」「深呼吸して」「落ち着いて」などは、却って混乱してしまいます。
2. つっかえながらも、一生懸命話そうとしている時は、遮らずに、ゆったりと最後まで聞いてあげて下さい。最後に「～だったね」と、話の内容を繰り返したり、まとめて返してあげて下さい。子供達は伝わったうれしさと、お話することの楽しさを感じることができます。
3. 吃音がたくさん出ている時は、「どうして?」「どんなふうにな?」などの難しい質問や難しい説明を求めることは避けましょう。吃音が出やすくなります。
4. 友達からの指摘や真似、からかいは、やめさせて下さい。「わざとじゃないよ。そうなることもあるね。一生懸命お話しているから、ちゃんと聞こうね」など。先生の対応が子供達のモデルになります。
5. 自信の持てる機会(得意な事を褒められる体験など)を多く作って下さい。話し方だけにとらわれるのではなく、自己肯定感を育む事ができます。

吃音の症状が軽減しない、苦しそうに話をしている、本人が「話せない」などの訴えをした場合は、言語聴覚士などの専門家にご相談下さい。

●くせの5項目（金生由紀子）

（1）説明と付け方

CLではチックを「くせ」と表現しています。5～9の5項目で過去1年間にチックがあったかどうかをスクリーニングする内容になっています。

5項目中、5～7は運動チックについての項目になります。5と6は典型的なチック（すばやく動きを繰り返すものであり、単純運動チックと呼ばれる）であり、特に5は最も一般的な顔面や頭部のチックの項目です。7はそれらよりはややゆっくりした動きでわざと行っているように見えるチック（複雑運動チックと呼ばれる）の項目です。しかし、チック以外の動き（いわゆる“習癖”や落ち着きのなさの表れなど）もチックがあるとみなされてしまうかもしれません。従って、5と6は目立たなくて、7だけが「しばしばある」、「常にある」場合には、本当のチックではない可能性が高いと考えてよいでしょう。

8と9は音声チックについての項目です。どちらも典型的な音声チック（急に音声を発するものであり、単純音声チックと呼ばれる）について訊ねています。

（2）園での関わり方

幼児期には、大人が気にするほど本人も周りの子どももチックを気にしないで生活していることが多いようです。一方、チックについて違和感を覚えて不安になったり、自信が持てなくなったりする子どもも見受けられます。本人や周り（家族、友だち）がチックについてどう感じているかを把握し、それも参考にして対応した方が良いでしょう。

本人がチックをやめようと思っても必ずしもやめられるとは限りません。「やめなさい」などという指摘が、かえってチックを気にさせることになったり、自信を失わせたりすることがあるので、そのような対応は避ける方が良いと思います。いずれにしても、チックにとらわれずに、本人らしく日々の活動ができるように支援することに心がけたいものです。

チックは心理的要因で起こるわけではありません。しかし、心身のストレスがたまってくると悪化することがあります。一般には、気持ちが安定していたり、何かに集中して取り組んでいた時には出にくくなり、楽しくて興奮している場合も含めて気持ちが落ちつかない時に出やすくなるとされます。実際にどのような場面で出やすいかを観察して、対応の参考にした方が良いでしょう。

●読み書きの5項目（原 恵子、北 洋輔）

（1）説明と付け方

読み書きに関する5項目は、子ども達の文字や音遊びに対する興味や学習の基盤になる力について尋ねるものです。こうした興味や力は、就学後の読みや書きの習得に大きく影響することが分かっています。この5項目は、読み書きの力そのものを評価するものではありません。就学前の文字の学習は義務づけられていませんので、就学前の子どもの読み書きの力の評価は、慎重に考える必要があります。

項目10と14は、文字に対する興味を尋ねています。項目10は読むことに対する興味、項目14は書くことに対する興味についての質問です。絵本を人に読んでもらうことは好きなのに、自分では絵本を読もうとしない、読みたがらない場合が該当します。またお絵かきの時に自分の名前や物の名称を書きたがらない、文字や文字らしきものを書いて交換するお手紙ごっこに興味を示さないなどの姿が該当します。

項目11はことば（語）の言い誤りについて尋ねるものです。単語の音の順序が入れ替わる誤り（例：エレベーター（エレベーター）、トウモロコシ（トウモロコシ）など）や、音の数が増える／減る（クリスマス（クリスマス）、かたたき（肩たたき）など）誤りです。こうした言い誤りは、2～3歳児では多く見受けられますが、年長児になっても、頻回に見られる場合には注意が必要です。なお、「いしゅ、いちゅ（椅子）」「ちやかな、たかな、しゃかな（魚）」などの幼稚な発音はチェック対象ではありませんので、ご注意ください。

項目12は、音遊びに関するものです。音遊びとは、一音ずつ言いながら一歩進んで遊ぶグリコの遊び、一音に合わせて手を叩く手遊びなどのことです。単語を「グ、リ、コ」とか「バ、ナ、ナ」と一音ずつ区切れず、一語（‘グリコ’、‘バナナ’）で一歩進む／一叩きするなどの場合がチェックすべき姿に該当します。こうした姿が見られると、将来、文字学習（一文字と一音の対応を学習する）につまずきが生じる可能性があります。

項目13は、ことばの音を記憶する力を尋ねています。歌のメロディは覚えられるのに歌詞は覚えられない、お友達の名前が覚えにくい、ジェスチャーを多く使って、ことばで表現することが少ないなどの姿が見られる場合、その背景に、ことばの音を正確に思い浮かべにくいことが推測されます。頭の中で思い浮かべることばの形が不正確であったり、不安定であると一音ずつを明確に把握できず（項目12を参照）、文字と音との結びつきの学習に影響することがあります。

このような5項目に関する要注意と思われる姿が、ほぼ毎日見られる場合には、「しばしば」

や「いつも」にチェックをつけて下さい。チェックされた項目が多いほど、文字の学習の土壌が弱いことが推測され、就学後の読み書きの苦手さにつながる可能性が高くなると考えられます。

注意していただきたいのは、全体の発達がゆっくりなお子さんです。例えば、知的な問題があると、「しばしば」や「いつも」が多くなります。知的な問題があるお子さんに対しては、知的な問題が無い場合とは異なる配慮が必要になることがあります。生活の中での指示理解や会話の様子、集団の生活での動きの様子（言語を理解して動くのではなく、周囲の動きを見て動いているなど）、遊びの内容などをよく観察して下さい。

（２）園での関わり方

就学前は読み書きを教えるのではなく、読み書きの土壌を豊かにする大切な時期です。ですから、いくつかの項目でチェックされたとしても、いきなり読み書きそのものを教えることは適切ではありません。土壌が弱いまま教え込んでも、読み書きの学習は進みません。文字への興味が乏しい中で、無理矢理教えると、かえって文字嫌いになり、文字学習への拒否感を強めかねません。園では、文字を教えるのではなく、文字学習の土壌を整え、豊かにする関わり・活動を心がけて下さい。読み書きの土壌を豊かにする活動としては、ことばの音（オン）への意識を高めるものがお勧めです。園の集団生活の中で、取り入れていただきやすい活動の具体例は以下の「読み書きの土壌を豊かにする活動例」で紹介します。

1対1での絵本の読み聞かせも、是非、取り入れていただきたい事柄です。絵本の読み聞かせは子どもの発達にとって、たくさんよいことがあります。読み書きの発達からみて、読み聞かせをお勧めする理由は次の3点です。

一つは、読み聞かせによって、文字への関心を高めることができるかもしれないということです。集団での読み聞かせでは、注意がそれがちなお子さんでも、その子の興味にあったものを選び、個別に読み聞かせると、よく集中して聞くことができるものです。絵本のページを一緒に見ながら、お話しを楽しく聞くうちに、「先生は一体何を読んでいるのだろう」、「こういう形（字）、こんな風につながったもの（単語）はさっきのページにもあった」などという気づきが生まれ、文字への興味につながるかもしれません。

二つ目は、読み聞かせは、読み書きだけでなく、その土台であることばの発達にとって、よい栄養になることです。絵本に記されていることば（書きことば）は、日常会話（話しことば）とは異なります。読み聞かせによって、多彩なことば（語彙）や、表現、お話しの展開の仕方に触れることは、話す力、聞く力を含めたことばの発達全体にとって、とても大切な学びです。

三つ目は、絵本を共有した楽しい経験は、子どもの情緒発達にとって、よい影響があるということです。情緒の安定は、子どものあらゆる面での発達、学習の基盤です。

読み書きの土壌を豊かにする活動例

①ことばの一つ一つの音の意識を育てる遊び：ことばの音を一つずつ区切って、音と動作（手や足）を対応させる活動は、単語全体の音のイメージを正確にし、個々の音を分ける力を養い、平仮名一文字と一音の対応の基盤となります。

・グリコ遊び：階段や園庭に書かれたマスを、じゃんけんで勝った方が、「グ、リ、コ」と言いながら一音ごとに一歩ずつ進みます。例えばグーはグリコ、チョコキはチョコレート、パーはパイ

ナップルです。チョコレートとパイナップルには、音への気づきの発達のレベルによって、異なる区切り方が見られるかもしれません。どうするかを子ども達に考えさせて、クラスなりのルールを決めてもよいです。あるいは、問題が起きないように、チョコはチョコ、パーはパイヤなど他のことばにしてもよいと思われまます。

・ことばすごろく：絵カードを裏にして中央に重ねて置き、順にカードをめくって、出てきた絵の名前を言いながら（「ウ、サ、ギ」のように）一音ごとに一コマずつ進めます。絵カードの選択によって、ことばの長さや区切り方の難易度を調節することができます。

・手拍子遊び：先生「動物の名前言って！」、子ども「いぬ！」、先生「皆で、イ、ヌ」（と言いながら手を2回叩く）、子ども達「イ、ヌ」（と言いながら手を2回叩く）、先生「他の動物は？」…のように、カテゴリー名をあげて、子ども達にカテゴリー内のモノの名前をあげさせて、手拍子をしながら言ってみせます。

②ことばの音で遊ぶこと：ことばが一音ずつ区切れたら、その中の音を使った遊びができます。

・〇のつくことば集め：ことばの最初の音（語頭音）を意識させるゲームです。「‘たぬき’の‘た’がつくもの探して〜！」と、子ども達に呼びかけます。子ども達は、単語の最初の音のイメージ（この場合は“た”）を思い浮かべながら、教室の中を見回したり、頭の中で、知っていることばをあれこれ引き出して、探します（「‘いす’は‘い’から始まるから違う。‘くれよん’の最初は‘く’だから、これも違う。あっ、‘たいこ’は‘た’から始まる！‘タンクローリー’もだ！・・・）。上手にできるようになったら、音を与えずに、「‘きつね’と同じので始まるもの探して〜！」と、少し難しくすることができます。

・しりとり：単語の最初の音と最後の音がわかるようになると、しりとりができるようになります。しりとりをするには、単語を一つひとつの音に分けること、最後の音を取り出せること、その音を最初において、新たな語を考えることが必要です。ことば（語）の音に分ける、取り出す、移動させるなど音を操作することによって、単語の音への意識を一層高めることとなります。しりとりには、こうしたことばの音を操作する力だけでなく、ことば（語）をたくさん知っていること（語彙力）が必要です。豊かな語彙の獲得は、将来、読み書きの発達を支えます。

・逆さまことば：「‘いか’を逆さまからいうと…‘かい’だよ。では‘さか’を逆さまから言うか？」など、ことばを逆唱する遊びです。通常、年長児は、2つの音のことばなら、楽しんですぐ答えることができますが、苦手なお子さんは、指を折って考えてもオッケーです。指と音を対応させて考えることで、ことばの音への意識が高まります。

③文字の扱い：生活の中には、たくさん文字があります。読み書きを直接教えなくても、文字への気づきを促すことができます。

・生活の中の文字への気づきの促し：お友達の持ち物についている名前について、「たろう君の‘た’とたかし君の‘た’と同じね。」などの日常でのやりとりは、文字に注意を向けさせるきっかけになるかもしれません。

・かるた遊び：文字の読み書きを教えなくても、多くの子ども達は、自然と文字を読み始めます。子どもたちが文字を知り始めたら、かるたを行うことができます。読み札をよく聞いて、最初の音を取りだし、覚え始めた一文字と対応させて札をとる。取った札の数を競う遊びは、文字を知りたいという意欲を高めることでしょう。ことばの音の意識が未熟で、文字を知らなくても、絵が手がかりになるので、参加することができますし、繰り返すうちに、文字への関心がう

まれるかもしれません。

●運動の5項目（斉藤まなぶ）

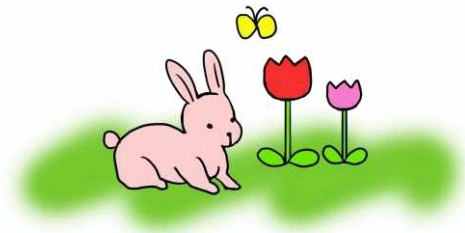
（1）説明と付け方

CLの中で行う運動のチェックは15～19の5項目です。これらは2923名の年長児の調査により、運動が苦手な子どもたちの特徴を抽出したもので、年長児の協調運動能力をバランスよく評価できる項目になっています。5項目中、15～16は体を大きく動かす運動（粗大運動）、17～18は手先を器用に動かす運動（微細運動）、19は例えば目と手など、二つの器官や機能が連動する動作（協応運動）の項目です。粗大運動の項目のうち、15は走る能力、16は運動を成し遂げる能力を見ています。微細運動の項目では、17は作業を速やかに終える能力、18は作業を正確に行える能力を見ています。協応運動の項目である19は姿勢を保持する能力を見ています。普段の園での活動の様子を観察して、評価してみましょう。この項目の1つ以上に「しばしばある（時々より多い）」または「常にある（毎日ある）」のチェックがつくお子さんは、明らかに運動が苦手であり、その上、知的な遅れが目立たない場合は、発達性協調運動症の可能性がります。

（2）園での関わり方

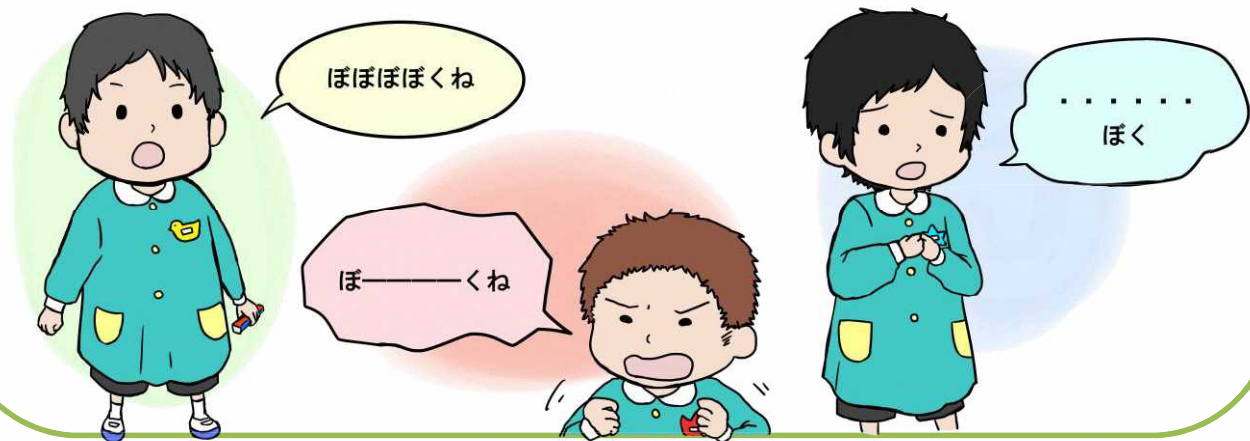
運動能力は小脳の発達が加速する年長児の頃に大きく成長するため、園内の活動でも体を使う遊びや競技が増えてきます。運動は肥満の防止にもなり、先生方としては活動を増やしたい時期だと思えます。そんな中、運動の苦手な子どもたちが、うまくできなくて恥ずかしがったり、かっこ悪いことを気にしたり、運動会やお遊戯会の前に体調を崩したりお休みしたりという体験に心当たりがあることでしょう。これらは、周囲の大人たちが「運動ができることがかっこいいことで、褒められることだ」という価値観を持っていることが影響しています。これらは日本だけでなく万国共通のことです。確かに運動のできる子は知的な能力が高い子が多いかもしれませんが。だからといって運動の苦手な子が劣等感を抱く必要はないのです。協調運動が苦手なお子さんたちは、幼児期から運動能力の苦手さを自覚しています。運動の苦手さは心と行動の問題に発展することがわかっており、子どもの身近にいる周囲の大人の関りが重要になります。幼児はまだ発達の過程であり、できることにも個人差があります。運動は競争や承認の手段ではないことを知っておきましょう。幼児は、体を使ってあらゆる事を学んでいます。運動能力への自信が低下すると、好奇心や挑戦への道を失ってしまいます。運動の結果より、感覚や認知を育む経過を楽しむことが発達にとってはより重要です。

園での具体的な関わり方としては、体を使った遊びを増やし、子どもの感覚や身体の成長を促していくことです。感覚過敏があって活動に参加したくないときは、その子の好きな遊びや道具を通して、少しずつ苦手な感覚にチャレンジできるようにし、感覚を和らげる材料を使うなど工夫があるとよいでしょう。気になるお子さんに関しては、保護者の方と家庭での遊びや行動、休日の過ごし方などについて情報交換を行い、運動の機会を増やしていくことを話し合ってみることをお勧めします。



吃音（どもり）について

吃音は、しゃべる時に、はじめの音を繰り返す**連発**（ぼ, ぼ, ぼぼくね）や、音を伸ばす**伸発**（ぼ——くね）、なかなか音が出てこなくなる**難発**（.....ぼくね）などの症状があらわれて、滑らかにお話ができない状態をさします。



吃音の原因について

吃音の原因は特定されていません。親御さんの育児方法や園の接し方が原因ではありません。ことばが急に伸びる2～4歳ごろに、10～20人に1人位の割合で、起こります。お子さんによっては、新学期や発表会の前になると調子が悪くなり、時間が経つと軽減してくるなど、吃音の症状には波があります。

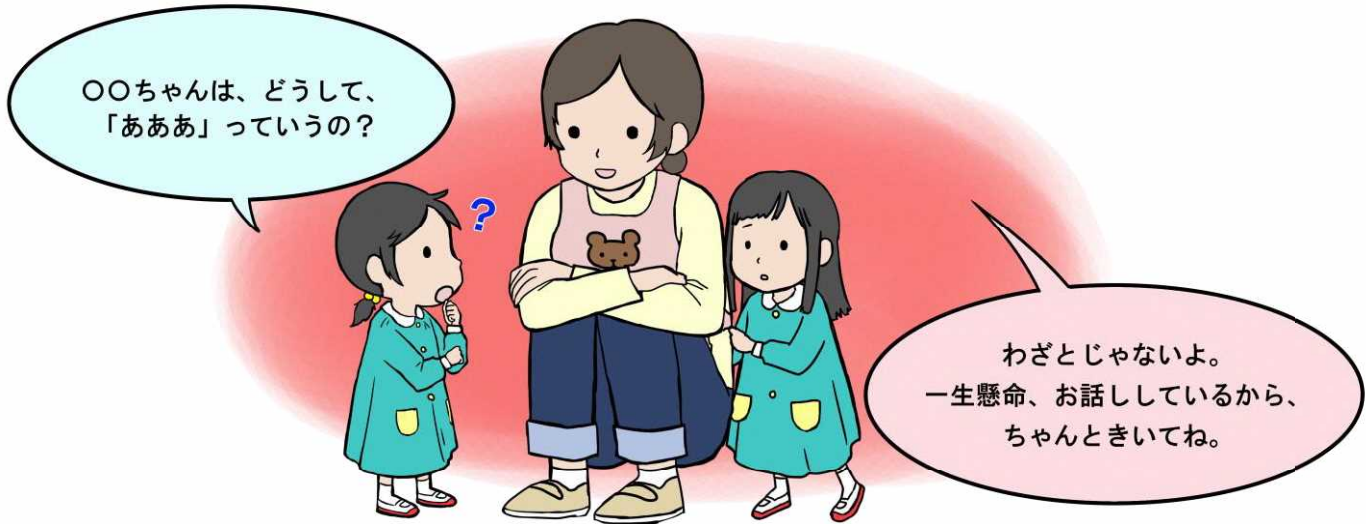
多くのお子さんは、成長とともによくなっていくといわれていますが、そのためには、**良い環境**が必要です。

生活の多くの時間を過ごす園での対応について、ご協力ください。

クラスに「吃音かな？」という子どもがいたら

ことばに関するからかいは、やめさせて下さい

お子さん達は、純粹に「不思議だな」と思い、「どうしてそんな話し方なの？」と聞いてくることがあります。あるいは、話し方の真似をするお子さんがいるかもしれません。吃音のあるお子さん達は、少しのことでも傷つき、吃音の悪化につながる場合があります。



話し方のアドバイスはしないでください

「ゆっくり」、「深呼吸して」、「落ち着いて」・・・などは効果がなく、かえって混乱してしまいます

「どうして?」「どんな風に?」などの質問はさげましょう。

難しい説明をしようとする、吃音がでやすくなります



つかえても、話し終えるまで、さえぎらずに聴いて下さい

聞き終えたら「～なのね」と話の内容を返してあげて下さい。最後まで聞いてもらった満足感と、伝わったという安心感がもてお話しすることの楽しさを覚えます。

自信の持てる機会（得意なことを褒められる等）を多く作って下さい

自分を肯定的にとらえる姿勢は、幼児期につちかわれ、ことばの状態も良くします。



先生方の一言がお子さんの成長につながります